ことぶきしきさんばそう

寿式三番叟

〔解　説〕

現行作品は、宝暦十三年に大坂豊竹座新築に際して御祝戯曲として披露された、と言われるものを明治期に二世豊澤団平が改作したものです。天下泰平・五穀豊穣を願うおめでたい曲で、能の「翁」が元になっています。後半、二人の三番叟の掛け合いはコミカルで微笑ましく、長唄の寿式三番叟とはまた違った趣となっています。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

それ豊秋津洲の大日本、国常立ちの尊より、天津神七世の後、地神の始め、天照大神、岩戸に籠らせ給ひし時、世は常闇となりけらしその時に、四方津神、八百万の御神達神集めに集め給ひ、庭火を焚いて庭神楽、神すゞしめと木綿襷、太祝の神歌や、式三番のその謂れ、おさ〳〵申すも恐れあり。

おゝさへ〳〵ほふ、悦びありや〳〵、わがこの所よりも外へはやらじとぞ思ふ。

物の音に連れて立ち舞ふ小忌衣、千歳は近江なる白髭の御神なり。黒き尉は住吉の大神。鼓は浪のとうど打つ、音は高天原なれや。岩戸に向かふ神神楽、ほそろぐせりと吹く笛も、ひいやひしぎの音色まで、春は霞の立ち姿。

そなたこそ。

初日は諸願満足円満、二日の日はまた二つ柱。宇津女の神子が、一ト二タ三四五ツ六ユ七八九ノ十、百千万の舞の袖。五月のさ女房が笠の端をつらねて、早苗追取り、打ち上げて諷ふた。千町万町億万町。田をばぞんぶりぞ、田をばぞんぶりぞ。ぞんぶり〳〵〳〵ぞ。御田を植ゑるならば、笠買ふて着せうぞ。笠買ふてたもるならば、なほも田を植ゑうよ。三日は福徳寿福円満、子徳人の子宝、車座に並べた。たつまついるまつかいつくひっつく、火打ち袋にぶらりと付けて候ふぞ。これ式三の故実にて、三日これを舞ふとかや。

柳は緑花は紅、数々や。浜の真砂は尽きるとも、尽きせぬ和歌ぞ敷島の、神の教への国津民。治まる御代こそ目出たけれ。

戎舞

えびすまい

〔解　説〕

淡路の人形操りのはじまりについては、いろいろな伝承がありますが、中世にまでさかのぼった時代に、摂州西宮（現在の兵庫県西宮市）のエビスカキと呼ばれる芸能集団と交渉を持ったようです。エビスカキとは西宮戎神社の信仰を広めるために、戎神の人形を舞わしてお祈りをし、戎のお札を配って歩いた芸能民のことです。江戸時代の書物に淡路島にもこの芸能民の流れがあると載っており、これが今日まで伝わったのが『戎舞』で、淡路島でも昭和初期まで門付け（家々を回って門先で舞わす）を行っていました。家々に配る座本名（劇団名）の入った御札も数多く残っています。

【あらすじ】

現在上演をしている『戎舞』の内容は、福の神戎様が庄屋の家にやってきて、ふるまい酒に酔いつつ生い立ちなどを語って舞い、さらに、酒を飲み人々が幸せになる様に祈ります。その後、船で沖に出て大きな鯛を釣り上げるというもの。かつては淡路の漁村の人形芝居で必ず上演され、釣り上げる鯛に本物を使うこともありました。戎様がお酒を飲む時の祈りの言葉もその場にあわせて変わるので、お楽しみ下さい。

乾の方より戎殿の御入り。釣竿かついで、どや〳〵〳〵入り来る。

えびす「ものも、たのもうか」

庄屋「ハイ〳〵どなたさまでございますか」

えびす「三国一の福の神が参った」

庄屋「コレハ〳〵、ようこそお越しくださいました。まず〳〵これへ。」

えびす「家を清めて神酒をだせ」

庄屋「ハヽかしこまりました」

えびす「サヽ早くいたせ〳〵」

盃も三献相済めば、この戎が一さし舞はんと扇をしやんと身のそなへ。サテ〳〵御目出度き戎殿の、生れ月日をいつぞと問へば、福徳元年正月三日、寅の一天まだ卯の刻になるやならずに、信州信濃の武井が宮にて、やす〳〵と御誕生なされた〳〵、なされ〳〵、なされた。

納戸の口よりあつ湯をいだし、熱田が口よりぬる湯をいだし、あつ湯とぬる湯をうめ合せ、産湯なんどを奉る。

ソモ、ソモ〳〵、目出度き西宮の戎三郎左衛門の尉は、信ある人には福をあたへ、福を、守る神々と、祝い申さば、御蔵もきれいに御七五三縄引いて、氏子衆が集りて笛の太鼓、カンコ、亀の子が、乙女の鈴の音に合はせて、戎さんが浮いた〳〵〳〵、浮いてきた。

烏帽子狩衣、折り目高に着なして、四ツ目のワランジ、シヤンズリシヤン〳〵とはいて、御蔵の中に飛入つて、四方をキツト見てあれば、サテ、わいたりや〳〵、海の幸、山の幸、かやうなる目出度きよき五三なるものは、我が前へ

と引きよせておいて

えびす「・・・・・・・・一献いたそうかい」

えびす「・・・・・・・・もう一献いたそうかい」

えびす「・・・・・・・・もう一献いたそうかい」

えびす「・・・・・・・・もう一献いたそうかい」

えびす「最後に・・・・・・・・もう一献いたそうかい」

したものこそはほしにけり。

サテ、この戎が酒に酔うたる心もちは、右の方へはヨロ〳〵〳〵、左の方へもヨロ〳〵、ヨロ〳〵、ヨロ〳〵とよろめいて、当地に福の神うつした〳〵〳〵。

時の遊山に、舟にとびのり、沖こぎいでて、沖ともなれば、須磨や洲崎や引波や立波、浜の千鳥の友呼ぶ声は、チリヤチリリと、散りとぶところを、漕ぎおほせて、大きなもんじや〳〵〳〵〳〵〳〵。戎さんが、鯛を釣ってオドツタ〳〵、オドツタ〳〵。沖は大漁、岡は満作、商売繁盛、尽きせぬ御代こそ目出度けれ

播州皿屋舗

（ばんしゅうさらやしき）

〔解　説〕

寛保元年（一七四一）七月、大坂豊竹座にて初演。為永太郎兵衛・浅田一鳥らの合作。江戸時代に流布した皿屋敷の怪談に、細川家の御家騒動をからませた時代物。舞台を播州姫路に書き改め、時代も室町幕府八代将軍・足利義政の頃に脚色しています。全編を通じ細川家の重宝である唐絵の皿が重要な役割を担っており、細川家とその宿敵・山名家の対立を背景に皿の争奪戦が展開していきます。聞きどころは皿屋敷伝説ではおなじみの、お菊の幽霊が「一つ二つ…」と皿を数える場面です。

【あらすじ】

姫路細川家の国家老・青山鉄山は、主家を横領し若殿の巴之助を毒殺しようと企んでいました。その密計を腰元お菊に立ち聞きされたため、鉄山は濡れ衣を着せお菊を抹殺にかかります。十枚揃いの家宝の皿の一枚を懐に隠し、鉄山はお菊に皿を数えるよう命じます。そしてお菊に足りぬ皿の疑いをかけて責め殺し、庭の井戸に投げ込みました。お菊は無念のあまり死霊となって鉄山を悩ませます。そこへ駆けつけた夫・三平はお菊の声を聞いて鉄山の企みに気づき、皿を取り戻すと共に鉄山を成敗して亡き妻の敵を取ったのでした。

青山館の段

〽入りにけり。

播磨がた。名さへ媚(なまめ)く。姫路の城下五軒屋敷の一構へは。御家老青山将監鉄山が下館。都がたの珍客とて等閑ならぬ。儲の亭。築山花畠泉水の。流れ涼しき夏の景。

切戸を隔て。こなたには。主将監。燕居の一間。くれ縁先の踏壇飛石苔むして。古井にしげる虎耳草花。しやれ木の井筒はねつるべ。すねた物好奥深かく。故ありげなる住居なり。

されば鉄山兄弟が胸の工みは木影なる。心をくばる折こそあれ。何かは白砂の飛石を。下よりむく〳〵。刎かへせば。

忠太「コハ何者」

と忠太が身がまへ。

鉄山「アヽいや騒ぐな弟。様子は跡でしれる事。モ気遣ふ事は少しもない」

と。せいするうちに大の男の黒装束。穴の中よりぬつと出。持つたる栄螺のともし火を。ふつと吹き消し跡取り。繕ひ。鉄山が前にかつ蹲(つくば)ふ。

鉄山「ホヽ外在の蟻助大義〳〵。これに居るは忠太といふて身が弟。心置かずと冷光院(れいこういん)の。御殿の様子。サどふじや聞きたい〳〵。」

蟻助「ハアいかにも仰せ付けられし如く。お寝間の下へ堀り抜き。心を付けて聞き届け候へば。高岡才蔵医者の安宅。夫婦連にて若殿の御子。喜(き)代若(よわか)様を御供申。御殿に逗留の様子承はる。又其外に鉄山様を疑ふ様な取沙汰は。相見へ申さず候」

と。一々語る蟻助が。顔を眺めて。

鉄山「ホヽウ遖ういやつ出かいた〳〵。長々生野(いくの)の金山を働し故。汝が頬(つら)なまじらけて見苦しい。土気を払ふ妙薬をこしらへ置いた。当座の褒美に与へんぞ」

と。一つの壺を取り出し。手洗柄杓に薬をうつし。水汲入れて指出せば。

蟻助「ハアコハありがたし」

と追つ取つて戴き〳〵。ぐつと一口呑かと思へば。忽五体悩乱し。虚空を掴んで七転八倒。あをち苦しむ其有様。

忠太「コハ〳〵いかに」

と驚く忠太。鉄山かた頬ににこ〳〵笑ひ。

鉄山「フヽヽヽヽハヽヽヽヽ一大事を知りぬいて居るあの下郎め。幸毒(さいわい)の試(こころみ)に殺してしまふ我が所存は。弟ながらよも知るまじ。巴之助へ無二の忠臣と見せ。この屋敷へ招き入れしは。毒害をして病死と云いたて。我が大望を達せん計略。まつこの如く毒にくるしみ。巴之助がくたばらばハレ心地よからん」

と。たばこ引きよせ騒がぬ鉄山。今迄明かさぬ謀反の根組(ねぐみ)。始めて聞いたる忠太はぎよつと。お菊がこぬ間に死ねかしと切戸の内をさし覗き。あぶ〳〵あせる其中に。毒の効能蟻助がごつとり息は絶果てたり。

鉄山「ホヽウ上首尾〳〵。巴之助はこの程より。鎮守の社へ日毎の参詣。アノ泉水にて垢離を取るこそ幸い。毒を流して自滅させ。病死の体にもてなさん。最早一家中は。大半味方に付け置いたれば。今日只今宝の皿を奪ひ取り。将軍家へ

差し上げ。細川の家を押領せん事掌（たなごころ）の内にあり。ハヽア将に今。天に一定の時至れり」と。しめし合はする折も折。来かゝるお菊は切戸の内。皿箱携へ立ち聞く共。しらぬ忠太はぞく〳〵勇み。

忠太「ハヽア天晴大将聡明英智。あの泉水へ毒流しとは。コレ究竟の御術善は急げじやこの隙に」と。件の器を携へて。かけ行く向かふへお菊がずつと。

お菊「忠太様待たしやんせ。」

忠太「ヤアあのそなたは今のを。」

お菊「ハイ聞いたでもなし聞かぬでもない。ガ何はともあれお泉水へ。そんな物を流さふとは。マ訳もない事さしやんすな。」

忠太「イヤサ是は物でおじやる。」

お菊「物とは何じやへ。」

忠太「サア是は。」

お菊「サア〳〵何でござんすへ。」

忠太「アヽいやさ」

鉄山「コリヤ〳〵お菊。この間の雨続にお泉水が濁りし故。若殿のお身には毒じやと思ひ。典薬が調合せし水澄（すま）しの妙薬。水の毒を流せといひしを。あぢに聞きなし。気の廻りしは道理〳〵」と誠しやかに云ひ廻せば。遺女のあどなくも。

お菊「コレハマア〳〵ほんにわたしとした事が。モ何を聞やら聞きはつつて。今の様に申したがお気にさはらば。御赦されて下さんせ。ホヽヽヽ」と会釈する。

鉄山「ホヽウ疑ひ晴れて満足〳〵。忠太は早く望みに任せ。御皿を拝見致したし。それ手水を」

と気を付れば。気転も菊が浅からぬ。井筒の。元に立ちよりて手もともゆらに汲上る。釣瓶を忠太が取り上げて。清めの手水を結ぶ間に鉄山は、帛紗開いて紐とく〳〵。箱の内なる御皿をそつと一枚懐へ。隠し手早く直し置く。お菊は何の気も付かず。後は我が身の敵ともしらぬ心ぞ。是非もなき。

さあらぬ体に

鉄山「コリヤ〳〵お菊。ソレ大切の御皿なるぞ。念のため数を改めその上で。両人とも拝見せん。早とく〳〵」

と鉄山が。指図にお菊が恭しく。包みし帛紗打ち敷きて。蓋押し開き御皿を。帛紗の上に一枚づゝ。読みならべて。

お菊「ハテめんよふな。たつた今御前で。箱の錠は夫にかはつてわたしが明ける。内の封印は殿様の直にお切りあそばす。その上とくとわたしが読んで受け取って参りしは丁ど十枚揃ふてあつたが。一枚足らぬは。ハテふしぎな」

と箱を探しつ傍りを見廻し。立たり居たり。うろ〳〵するこそ道理なれ。

鉄山わざと驚く面色。

鉄山「ヤアかほど大切なる御皿を足らぬといふて事が済ふか。いよ〳〵なくんば女。その方が命がないぞ。」

お菊「エヽ。」

鉄山「ヱヽとは。マこな横着者めが」

と。きつぱ廻せば。

忠太「アヽいや兄者人お待ちなされ。もしも殿の御前に。取り残してサあるまい物でもない。ソレ

菊。ちやつと見ておじやれ」

と。色に引かるゝ肩持ち顔。

お菊「ヲヽほんにそふじや」

と。立たんとすれば。

鉄山「どこへ女め動きあがるな。御前へはソレ。忠太吟味せよ」

と。厳しき詞にぜひなくも。忠太は立て入りにける。

鉄山「ヤアおのれ大胆女郎め。こゝにない皿が何の御前にある物で。盗んでも盗まいでも。足らぬからはおのれが科(とが)。但しは又とばついて打ちめいだか。サアまつ直(すぐ)にぬかしおらふ。」

お菊「ナフ情けないお疑ひ。大切ない御皿を。何しに私がわりも盗みも致しませう。これが見へねば私が難義ばかりじやない。一枚足らいでも殿様や三平殿の身の難義。モお家の大事になるはいな。この上のお願ひには。どふぞ念ぱらしに今一度。改めさして下さりませ鉄山様。お情けお慈悲」

と手を合はせ。託ち歎けば。

鉄山「ヤアごくにも立たぬよまい言。左程に思はゞソレ。手ばしかく読んでみよ。鉄山これにて数取りする」

と。床机にどつかと腰打ちかけ。

鉄山「サアよめ。」

お菊「アイ。一つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「二つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「三つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「四つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「五つ。」

鉄山「コリヤ待て女。五枚の数はそれでよい。その後がもう五枚。サア性根をすへてきり〳〵読め。」

お菊「アイ。六つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「七つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「八つ。」

鉄山「〳〵。」

お菊「九つ。」

鉄山「〳〵。どふじやもふないか。」

お菊「テモめんよふな。」

鉄山「何がめんよふ。幾たび読んでも同じ事。皿が足らねばうぬがそつ首討ち放すに。サ誰が点の打人がある。但しはこの鉄山が無理だと思ふか。」

お菊「ナンノ〳〵。さら〳〵無理とは存じませぬ。殿様の御前ではきつと揃ふてあつた物が。ここへくる迄に足らぬといふは。私が因果でござりませう。」

鉄山「ヲヽその合点がいたらば。めろ〳〵ととこぼへずと。念仏申して観念ひろげ」

と。刀をずはと抜き放せば。はつと飛び退き身をふるはし。

お菊「マア〳〵待つて下さんせ。スリヤどふあつても殺さしやんすか。」

鉄山「くどい〳〵。」

お菊「ヱヽ申し鉄山様。そりやあんまり胴欲じや。死ぬる命は惜しまねど。失せたる皿の詮議もせず。このまま死んでは殿様ばかりか夫の難儀。そればつかりが思はれて。わしや何ぼでも死にとむない。命がおしいコレ。マ比興ではないわいな。どふぞも一度あの皿を。読み直さして下さりませ。」

鉄山「ヤアしつこい願ひ叶はぬ〳〵。未練者め」

と飛びかゝり。取つて引きよせ弓手のあばらぐつと突込みひとゑぐり。うんとのつけに七転八倒。

お菊「ヱヽ胴欲や是非もなや。あの皿ゆへに夫婦の者が。これ迄いくせの苦労せしかひもなふ。失ふた誤りあれば殺される。命はさら〳〵惜しまねども。跡に残つて我が夫の。難儀さしやるが。ヱヽいとしいわいのふ〳〵。この儘やみ〳〵死ぬるとも。魂は我が夫の。影身に添ふて御皿の。詮議をせいで置かふか。アヽこの訳がたつたひと言。逢ふて云いたい。マきかしたい。今日にかぎつて三平殿はなぜに遅いぞ。この世の名残に今一度。顔が見たい逢ひたいはいな。暫しの情けに鉄山様。とゞめを待つて下さんせ。どふぞ今一度あの皿の。数が読みたい〳〵」

と。今はの胸に。せまる思ひの数々を。かぞへ立て〳〵。歎き苦しむその有様目も当てられぬ次第なり。

鉄山「ヤア長ばへひろぐな叶はぬ」

と。刃を抜けば血は滝津瀬。よろぼひ廻るを切り伏せ〳〵とゞめの刀。この世を早く秋の菊。

散り行く身こそはかなけれ。

鉄山はしすまし顔。

鉄山「末期の水は勝手にくらへ」

と。傍の井戸へ死骸を打ち込み。血刀引つ提げ泉水の汀に立ち寄りしづしづと。掻器に水を汲み流し。血汐を洗ふその所へ。

いきせき出くる弟忠太。

忠太「ヤア扨はお菊を手にかけられたか。」

鉄山「ヲヽサ大切な御皿を失ふた科。赦して置かれず。」

忠太「イヤサ。テモ本人の菊を殺して。マ誰を詮議の手がゝりに。」

鉄山「フヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽ我年来の望を遂げ。主君の家を押領するとも。この皿がなくては叶はぬといふ事。汝ごときに習はふか。失せぬ物を失ふたといひしは毒害の一大事を女めが聞いた故。越度を拵へ。殺して仕廻ふ鉄山が謀。隠して置いた一枚の皿はコリヤこゝに」

と懐中より。取り出し見すれば横手を打ち。

忠太「ハヽアそふとはしらいで若殿諸共。御殿を一遍尋ねてもなかつたこそ道理ヤヽヽ兄者人遖々。細川家の重宝この皿が手に入るからは大望成就疑ひなし」

と。取りちらしたる御皿をしとやかに取り重ね。かしこの縁に押し直せば。

鉄山「コリヤ〳〵忠太。ソレ今にも三平めが来たりなば。お菊を殺した身の云抜。その皿はやはり九つはしたで置け。この一枚は身が所持する」

と縁先の。手拭取つて押し包み。懐中すれば。

時に怪しや梢に風あれ勢動して釣瓶の上に燃

へ上がる。氤氳たる心火の光り。井筒の中より

お菊が声。

お菊幽霊「ノウ申し鉄山様。その皿を今一度。どふぞ読せて下さんせ」

と。聞くより忠太はぎやつとばかり。

忠太「ノウ〳〵こはやこりやたまらぬ。赦せ〳〵」

もわなゝき声跡をも。見ずして逃てげり。

さしもの鉄山ぞつと身の毛も立ち上がり。奥の間さして行かんとすれど。後髪。引戻されてたぢ〳〵〳〵。家鳴震動空かき曇り俄かに。降りくる

〽雨のあし。いづくへ逃げんも真の闇。方角わかぬ死霊の業。鉄山は只茫然とあきれ果てたる井筒のもと。ありしにかはらぬお菊が姿。かげのごとくに顕はれ出。

お菊幽霊「のふ恨めしや鉄山様。その皿を今一度。読み改めず殺されし。恨みは誰に報はふぞや。一つ。二つ。三つ。」

耳を突き抜く猛霊の声をしるべに切り払へば。かき消すごとく井筒の上にくはつと燃へ立つ猛火の煙。むせんで鉄山かつぱと伏せば。

お菊幽霊「四つ。五つ。六つ。七つ。」

重ねし皿はぐはら〳〵〳〵。

お菊幽霊「八つ。九つ。ハア悲しや」

と叫ぶ声。障子に響いてびり〳〵〳〵。庭の木草も動揺し雨は。しきりに降りしきる。

かゝる折しも。船瀬三平武経は主君の御機嫌窺ひと。広袖合羽高下駄。忠義に心紅葉傘。横ぎる風にとられじと足も。いきせき歩みくる。

向かふに鉄山雨に平打。

三平「コリヤどふじや。お目でもまふたか。コレ気をつけられよ」

と引き立つれば。漸に心つき。

鉄山「ヤア三平殿か。」

三平「ホイ。」

鉄山「マよふこそお出。扨々俄に持病が起こつて。」

三平「それは御難儀。拙者も今日は冷光院様の館へ召され。それ故出仕も延引致いた。ガ殿の御機嫌はいかゞござるな。」

鉄山「気遣ひめさるな御機嫌はずんどよい。ガ貴殿もさぞお草臥。モお出の様子は某が。宜しく申し上げん。サア〳〵これから直ぐにお帰りあれ」

と。己が悪事を隠さんため。あせるにかひも嵐につれ。

お菊幽霊「一つ。二つ。」

死霊の数ふる声諸共。ぐはら付く皿を見られじとその身をかげに立ちまはり。隠せど三平気も付かず。

三平「道々もこの様にはなかつたが。」

お菊幽霊「三つ。」

三平「こゝへくると俄に。」

お菊幽霊「四つ。」

三平「マけしからぬ雨風。」

お菊幽霊「五つ。」

三平「いつにない鉄山殿。コリヤマどふなされた。」

お菊幽霊「六つ。」

三平「むしやうにこなたはうろ〳〵なさるゝぞや。」

お菊幽霊「七つ。」

三平「ナヽヽヽヽ何事でござるぞ。」

お菊幽霊「八つ。九つ。ハア悲しや」

と泣く声を。聞くより三平心にこたへ。

三平「ハテ心得ぬ。見ればあれにお家の重宝唐絵の皿。数ふる声は正しく女房。声ばかりで形の見へぬは。」

鉄山「ヲヽ合点が行くまい。十枚揃ふたあの御皿。一枚盗んだ科によつて。お菊は某が手にかけたはい。」

三平「何と。スリヤ女房は殺されたか。ハア。ハテナ御皿が失せたりとて詮議にも及ばず。理不尽に菊を手にかけ。左程の事を押し包んで某をいなしたがるは。ムウこりや鉄山。その方に詮議があるはい。」

鉄山「ヤア盗人たけ〴〵しい。評定もへちまも入らぬ。皿が足らねば預かりし汝も科。女めと同罪遁れぬ。覚悟ひろげ」

と抜きかくる。手先をしつかと。

三平「イヤサコレもがき召さるな。詮議のかゝつた青山鉄山。骨をひしいでも云はさにや置かぬ。胸の一物一々残らず。サア〳〵白状〳〵」

と。裾ばせ折つて。詰めかくれば。

さしも不敵の鉄山も懐大事とうぢつく身がまへ。見て取る三平

三平「扨こそお身が懐中に」

と。突つ込む腕先もぎ放し。するりと抜いて切り付ける。傘をすぼめて丁ど請け。引けばひらき。裾を払へばひらりとかはし。何れ劣らぬ早足の働き。暫く時をぞうつしける。

三平「女房喜べ。十の都合はコレこゝに」

と。悶絶したる鉄山が。懐より皿取り出し。

三平「妻の敵思ひしれ」

と。さし通し〳〵。悪の報ひは忽ちに心地よくこそ